

## 新町と古町

熊本の旧城下町は、城のすぐ南西に位置しています。城下町は、城の内堀として機能していた坪井川によって二分されています。川の北側で城に最も近い区域が新町（「新しい町」）、川の南側は古町（古い町）と呼ばれています。城下町というと、熊本城が築城された 17 世紀初頭に建てられた古民家が沢山ありそうなものです。しかし残念ながら、1877 年の西南戦争で熊本城が包囲された際に新町は破壊され、古町は大きな被害を受けてしまいました。その結果、最古の民家でも 1878 年のものしか残っていません。しかし、昔から商業地域であり、現在でも 17 世紀から続く老舗の商店や飲食店が軒を連ねています。

新町と古町の一番の楽しみ方は、お店の散策ツアーに参加することです。家族経営のお店では、地酒と一緒に馬肉の刺身を食べたり、辛子を詰めた蓮根揚げを食べたりすることができます。この料理は、1630 年代に熊本藩主・細川忠利のために店が考案したものです。

### 大型の薬屋から喫茶店まで

肥後象嵌（熊本流の金属細工）などの伝統工芸品を作って販売している店舗が、新町と古町のあちこちにあります。なかには、自分の手で作らせてくれる店主もいます。かつて藩主に献上していた巨大な漢方薬店（一般人用と城の職員用で入り口が分かれています）では、「諸病を治す薬」である諸毒消丸を試すことができます。独創的に復元された町家を利用した手作りの喫茶店や、川を真正面に見下ろす健康食品店など、新しい店舗もあります。昔は川が大通りとして機能していて、船を使って店舗や問屋に商品が運ばれることもありました。

古くからの商店街では、子供を守り火事を防ぐ菩薩である「お地藏さん」の小さな石像や、商売の神様である恵比寿像などが今でもよく見られます。

### 城下町の珍品

- 新町と古町を分かつ坪井川には、2 本の興味深い橋が架かっています。この 2 本の橋は、東京の日本橋や二重橋の設計も手がけた熊本出身の橋本勘五郎による設計です。橋の名前は明八（明治 8 年、1875 年）、明十（明治 10 年、1877 年）と、橋が架けられた年にちなんでつけられています。かつて明八橋には城門がありました。
- 古町は「一町一寺」の原則に沿った配置になっています。古町のこの地区には 24 もの寺院があり、家々の裏の路地にひっそりと佇んでいます。しかし、当時の姿で残っているものはそう多くありません。昔、境内の中庭では武士が剣術の稽古をしていました。

- 最も印象的な店の多くは明治時代（1868-1912）のものですが、大正時代（1912-1926）の建物にも見事なものがいくつかあります。綺麗に復元された1919年築の銀行（古町）や、1924年に建てられた本屋（新町）などが見どころです。この本屋の過去の有名な顧客には、夏目漱石（1867-1916）、ラファディオ・ハーン（1850-1904）、森鷗外（1862-1922）などの著名作家がいます。
- 古い建物の多くは、表に店、真ん中に庭園または中庭、裏には店主の家があり、門や窓枠には複雑な木工細工が施されています。